

1	言語
言葉の力をつけよう (音読2年③) 〔随筆「枕草子」〕	
名	前

体験や読書などをもとに、それに対する感想や考えをまとめたものを「随筆」といいます。「枕草子」は約三百段から成る作品で、作者である清少納言が宮廷に仕えている頃に見たり聞いたりしたことや、季節の感想、人生観などが簡潔な文章で鮮やかに描かれています。

《解説》

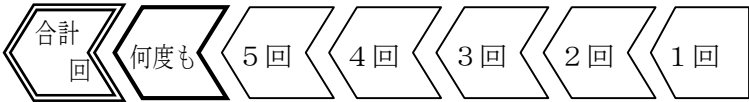
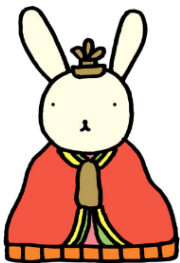
雪がとてもたくさん降った朝の出来事について書かれています。のんびりと朝を過ごしていたところ、お仕えしている中宮定子様から突然の問いかけがありました。ほかにも女房たちがいる中、清少納言は素早く行動を起こしました。謎かけに応えた清少納言に対して、定子様は笑顔を向けられ、女房たちは、清少納言のすばらしさをほめたたえました。

やってみよう

古典作品は、現代文とは異なる言葉遣いがあり、主語が省略されていることがあります。繰り返し音読して情景を想像しながら、読み味わいましょう。

雪のいと高う降りたるを、例ならず
御格子まゐりて、炭櫃に火おこして、
物語りなどして、集まりさぶらふに、
「少納言よ、香炉峰の雪いかならむ」
とおほせらるれば、御格子あげさせて、
御簾を高くあげたれば、笑はせたまふ。
人々も、「さる」とは知り、歌などにさへ
歌へど、思ひこそよらざりつれ。
なほ、この宮の人には、さぶきなめり」と言ふ。

- 登場人物
・ 少納言 (清少納言)
・ 人々 (女房たち)
・ 宮の人 (中宮定子)
- 季節
・ 雪 ↓ 冬



《読んだ回数》

読めたら色をぬろう!



★知っておきたい古典の知識

『枕草子』は、清少納言によって書かれた随筆であり、紫式部によって書かれた小説『源氏物語』と並んで、平安時代の代表作として高い評価を受けています。二つの作品は、同じ時期に宮中で活躍した女性により書かれていることもあり、よく比較されます。

二人がそれぞれの作品で使っている言葉に注目してみましょう。それは、「をかし」と「あはれ」です。どちらも「趣がある」と現代語訳されますが、ニュアンスが異なります。

をかし …… 明るく華やかな感動。

『枕草子』で四〇〇回以上使われている。

あはれ …… しみじみとした感動。

『源氏物語』で多用されている。

身につけると…

筆者の感性や、人物象に迫ることができます。また、当時の人たちがどのようなことを考えていたのかを知る手掛かりとすることができます。

読んでみよう

《口語訳》

雪がとて深く降り積もったのに、いつになく格子を下したまま、炭櫃（いろいろのようなもの）に火をおこして、中宮様のもと世間話などしながら過ごしていると、「清少納言よ、香炉峰の雪はどんなでしょうね。」と中宮様がおっしゃったので、（あることをふと思い出し、そばにいた）女房に格子を上げさせて、私が御簾を高く巻き上げたところ、中宮様はお笑いになる。

（それを見ていた他の）女房たちも「そういう漢詩があることは知っているし、歌の中に詠み込んだりするけれど、今回のことは思いもみませんでした。やはり、あなたは中宮様にお仕えするのにふさわしい方なのでしょうね。」と言った。

《解説》

この話は、中宮定子が清少納言に謎かけをした場面です。「清少納言よ、香炉峰の雪はどんなでしょうね。」という謎かけに対し、清少納言は中国の詩人である白居易の「白氏文集」の中に書かれている漢詩の一部分を思い出しました。

香 炉 峰ノ 雪 ハ 撥 簾 看

（香炉峰の雪は 簾を撥げて看る）

そこで、清少納言は格子と御簾を上げたのです。「香炉峰の雪」が何のことなのか、中宮定子はもちろん、清少納言もわかっていなかったからこそできたやりとりです。

周囲にいた女房たちもこの漢詩を知っていたことや、和歌に詠み込んだ経験があることが描かれています。しかし、その中でも拔群の行動力を見せた清少納言は、中宮定子からはもちろん、他の女房たちから賞賛されました。

異国の言葉である漢詩を自在に読みこなし、日常生活に取り入れる平安時代の貴族の文化水準の高さには驚かされま